



海援隊旗(二隻の旗)

http://www.ryoma-kinenkan.jp

勇往 YUUOU MAISHIN 邁進

高松館長就任 新しい展開のとき

4月新年度待望の新館長が着任しました。心機一転スタートです。この夏からは、新館建設に向けての基礎工事も始まります。今までの風景が徐々に変わっていくものの、新しい記念館づくりがはつきりと見えてきます。来年度から1年間、記念館は休館に入ります。事務所は隣接する国民宿舎「桂浜荘」です。今までの「桂浜の龍馬」での基盤は変わりません。高松館長はじめ職員一同気持ち新たに、皆様の期待に応えるべく邁進します。一層のご理解とご支援をお願いいたします。

「温故知新」

来し方に学び、そこから明日を拓いていく

館長 高松 清之

初代・小椋克己館長は、大海に乗り出す船をイメージするようなデザインで記念館を、「龍馬への入り口」と位置づけて、今日の館の礎を築かれた。

また、森健志郎・前館長は、熱い思いを込めながら「龍馬の殿堂」へと発展させてくださった。

そして、再来年には新館が姿を現し、郷土の歴史をテーマとした博覧会も始まろうとしている。

さて、そんな中で三代目は。そして、記念館の果たす役割は。文化的要素に乏しく、歴史に不案内な自らを省みずお引き受けしたものの……。

「世の人は われをなにとも ゆはさへ わがなすことは われのみぞしる」という有名な龍馬の和歌があるが、いまの私は、「わがなすことは われさえもしらず」というのが正直なところである。

記念館の4半世紀に及ぶ歩みに学び、一日も早く、己のなさんとするを見出し、記念館という小さくはあるが数多の方々の大きな夢と希望を乗せて大海を行く船が、決して迷走することの無いよう、乗り組む仲間たちとともに「宜しく公儀に決」しながら、愚直に前へ進んでいくことを旨としていきたいと思う。



南西の海側から見た記念館
今年7月からこの風景の道路(左側)は閉鎖します

来年2017年は龍馬暗殺150年 「土佐から来たぜよ！」 「坂本龍馬」展

記念館が全国巡回へ

平成29(2017)年から150年前の慶応3(1867)年。

龍馬は土佐藩と手を結び、海援隊長として動きます。清風亭対談、海援隊改組、いろは丸事件、船中八策、起草、イカロス号事件などを経て、大政奉還へと「日本の洗濯」を実現させようとした龍馬。しかし、暗殺という悲劇が待っていました。来年、龍馬記念館は休館し、皆様にはご来館いただくことができません。ならば、「土佐から龍馬が行くぜよ!」と、岡山、熊本、広島、東京と4会場を巡回します。各地の会場、マスコミ等との共同主催で、記念館では初めての県外巡回企画展という「龍馬発信」です。ぜひお出かけください。

岡山・林原美術館

2017年1月20日～3月12日

熊本・熊本県立美術館分館

(4月上旬～5月中旬)※日程調整中

東京・目黒雅叙園・百段階段

(6月)※日程調整中、ソフトバンク社と主催

広島・ふくやま草戸千軒ミュージアム

(広島県立歴史博物館)

7月14日～9月10日

そこで、今号から開催各地の担当者に よるリレーエッセーを連載します(3面)。各地の特長が見えてくるはずですよ。

また、当館のエフエム高知ラジオ番組『海の見える窓』(毎週月曜日午前8:40)でも適時、担当者の皆さんにご出演いただきます。お楽しみに! 前田 由紀枝

「新国を拓き候」

「海を渡った、龍馬たち」展

(4月1日～7月1日)



北海道へ渡った 子孫たちを追う

龍馬、そして海援隊は海外開拓事業をめざしていた。海援隊の入隊資格にも、海外の志ある者、とある。北海道視察をした土佐の同志、明治に福島開拓に挑戦した隊士もいる。龍馬は、生きとし生けるものが喜びあえる新しい社会、新しい国作りを構想したのである。



「はまなし」坂本直行

龍馬
「小弟は蝦夷に渡らんとせし頃より、新国を開き候は積年の思ひ、一世の思ひ出に候」(慶応3年3月、印藤幸宛書簡)
「私(龍馬)は蝦夷(北海道)に渡ろうとしていた頃から、新しい国を開くことは長年の願ひ、一生を懸ける思いなのです」



お龍

「北海道ですか。あれ(龍馬)はずっと前から海援隊で開拓すると云って居りました。私も行くつもりで、北海道の言葉を一々手帳へ書きつけて、毎日稽古して居りました」



前田 由紀枝

「藩邸史料にみる幕末の京都」展が、3月31日をもって終了した。土佐藩京都藩邸史料の展示としては2度目となる今回は、幕末の事件に加えて、藩邸で暮らす土佐の侍たちのようすがわかる史料を複数展示した。

今回初出展の文書は、藩士の門限を記した「御侍中御門制」、西洋調練の実施について記した「覚」、御所の清和院門警備を土佐藩が任されたことを示す「九門外警固人数分配」などである。いずれも詳細に読み解くことで、多くの土佐の侍たちが京都でも藩の規律を守って勤務し、生活していたことがわかる。同じ時代、同じ京都で、同じ土佐の脱藩浪士たちが華々しく活動していたことと対照的である。

古文書ばかりの展示となるため、内容をイメージしやすいよう、今回も川崎真優さん(当館元職員)にイラストをお願いした。火事見物や調練欠席などの場面をカラフルに描いていただいた。特に、パネル展示した河原町の土佐藩邸図面から書き起こした平面図は、部屋の間取りに加え、藩邸内に暮らす人々も描かれた力作で、来館者にも好評であった。

亀尾 美香

藩邸平面図イラスト。展示では番号ごとに注を付した。

藩邸の様子が生々生きと 好評のうちに終了



「羅臼岳」坂本直行

主に坂本龍馬から直寛、直道、弥太郎、弥直、直行までを紹介したい。また、開拓農民として生きた坂本直行の油彩画、水彩画など今まで未公開の絵画も多数展示する。

2017年県外巡回展 「土佐から来たぜよ!『坂本龍馬』展」

担当者リレーエッセー①
岡山・林原美術館

東洋古美術、池田家資料など1万件を所蔵



林原美術館学芸課長
浅利 尚民

林原美術館は、岡山城内堀の傍らに所在する私立美術館です。岡山城二の丸の一角を占めるこの地は、江戸時代には対面所(迎賓館)が設けられ、明治時代になると旧岡山藩主池田家の岡山事務所として使用されていた由緒ある場所です。

当館は、昭和36年に急逝した林原一郎氏(1908～1961)の東洋古美術コレクション及び旧岡山藩主池田家から移譲された資料を中心に、国宝3件、重要文化財26件を含む約1万件を所蔵しており、昭和39年10月1日に開館しました。

現在は開館52年目を迎え、所蔵品を展示する企画展と他館の資料を紹介する特別展を中心に、年に5回程度の展覧会を開催し、広く一般に資料を公開しています。

当館の所蔵品は、大きく分けて2つの系統に分類されます。一つは林原氏個人の審美眼によって蒐集された個人コレクション、もう一つは旧岡山藩主池田家から移譲された大名の調度品類です。

林原コレクションは、刀剣や陶磁器、螺鈿、彫漆などに代表されるように、日本を含む東ア

シアの工芸品が大きな位置を占めています。六古窯の一つと数えられる備前焼や、仙台伊達家に伝来した竹菱菱紋時絵結婚調度などは代表的な作品です。

特に刀剣は、林原氏が最も熱意をもって蒐集したもので、備前刀の古刀を中心に国宝3口、重要文化財14口を収蔵しています。また近年の研究により、平成26年6月に発表した47通からなる戦国時代の古文書群「石谷家文書」も、林原氏の蒐集品です。「石谷家文書」は石谷光政(生没年不詳・頼辰?)の親子2代にわたる文書群で、彼らは第13代將軍足利義輝の奉公衆として仕えていました。光政の娘が土佐ある長宗我部



長屋門(林原美術館入口)

元親に嫁ぎ、また頼辰実弟は明智光秀重臣の斎藤利三であるなど、重要な局面に立ち会ったことが想定されています。16世紀半ばの戦乱の時代状況をよく伝え、とくに本能寺の変直前の天正10年(1582)5月21日に長宗我部元親から斎藤利三宛の書状などは、いまなお謎にまつまられたままの本能寺の変の原因を解き明かす鍵になるものとして注目されています。

一方、池田家旧蔵品は、近世・近代を通じて池田家が所蔵していた宝物類を、昭和26年に池田家から移譲されたもので、こちらが日本の近世大名家の文化財を代表する資料群となっています。

土佐藩郷士の家に生まれ、強い意志と類まれな行動力によって江戸から明治への道を切り開いた龍馬は、薩長同盟の締結や新国家の基本方針を「船中八策」としてまとめるなど、歴史の転換に大きな役割を果たしました。その生誕の地で関連資料を保存し、全国に向けて顕彰活動を行っている同館の資料を岡山へお借りできることを、たいへん光栄に思っております。開催にむけ、今後ともご指導いただけますようお願い申し上げます。

飛騰の紙面にスマホをかざして動画を見よう! 視聴方法は簡単!

① 右のQRコードから無料アプリ「COCOAR2」をダウンロード
② アプリを起動し、マークのついた写真にスマホをかざす

※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかる場合や、正常に動作しない場合があります。
※本コンテンツは2016年6月30日まで閲覧可能です。

「赤土峠に集合した 深尾家5人の家臣たち」 今久保 約雄



嘉永六年(1853)癸丑の年、はべりの来航で、日本中は騒然となった。「異民族は攘うべき」という鎌倉時代以来の合言葉の下に、薩摩や水戸に「癸丑以来の志士」という多くの若者たちが現れた。土佐はそれより数年遅れて雲霞の如く志士が現れ、下士層の志士たちは「土佐勤王党」を結成した。

私はそんな彼ら、幕末の志士に痺れるほど惹かれ、田中光頭伯の回顧録など何度も読み返した。特に、志士達が藩を脱する際の行動には大いに感銘を受けた。

さて、藩に属した人が藩を脱したり、帰藩命令などに背く行為に対し、いろいろな言葉が使われる。薩摩では、文化二年(1805)に蔵役人・海江田連(日下部連)が藩を脱した時には「駆け落ち」、土佐での例は「出奔」と記載されている。ひとまず、この稿では「脱藩」とする。

赤土峠に集合した若者たち

土佐藩で最初に脱藩したのは、文久二(1862)年2月の吉村虎太郎。翌3月には坂本龍馬が沢村惣之丞と

嘉永六年(1853)癸丑の年、はべりの来航で、日本中は騒然となった。「異民族は攘うべき」という鎌倉時代以来の合言葉の下に、薩摩や水戸に「癸丑以来の志士」という多くの若者たちが現れた。土佐はそれより数年遅れて雲霞の如く志士が現れ、下士層の志士たちは「土佐勤王党」を結成した。

私はそんな彼ら、幕末の志士に痺れるほど惹かれ、田中光頭伯の回顧録など何度も読み返した。特に、志士達が藩を脱する際の行動には大いに感銘を受けた。

さて、藩に属した人が藩を脱したり、帰藩命令などに背く行為に対し、いろいろな言葉が使われる。薩摩では、文化二年(1805)に蔵役人・海江田連(日下部連)が藩を脱した時には「駆け落ち」、土佐での例は「出奔」と記載されている。ひとまず、この稿では「脱藩」とする。



5人の脱藩者が集合した峠の顕彰碑=高岡郡佐川町・赤土峠

ともに脱藩、続いて4月には参政吉田東洋を暗殺した大石田蔵、安岡嘉助、那須信吾が脱藩していった。翌年の8月18日の政変後には、帰藩命令を無視した大勢の志士たちが脱藩者となった。さらに翌元治元(1864)年8月14日には、佐川・深尾家の陪臣5人が脱藩した。

土佐藩の家老・深尾家は、城下より西へ六里半(約26km)。山内家二代藩主の弟を養子に迎えた1万石の筆頭家老であった。その家来たちは貧しくとも仲間意識が強かった。

そんな佐川で、橋本鉄猪、浜田辰也は勤王運動をした罰で自宅謹慎中だった。年長者で隣家の池大六は、橋本と浜田の見張り役を命

じられていたという。そこに井原応輔、那須盛馬が加わった5人が、このときの脱藩者である。井原は上士、それ以外の4人は下士だといふ。

彼らは、池田屋騒動や禁門の変を聞くに及び、「仲間が遅れを取るな」という思いに逸った。橋本と浜田は見張り役の池まで誘い込み、同志の井原、那須の待つ赤土峠へ向かった。その後、の彼らの動きを思うとき、あまりに山深い小さな峠である。そこから北方の黒森山を抜け、伊予領から周防(山口)の三田尻招賢閣へ辿り着く。しかし、時すでに遅く、都は禁門の変の後、保守派政権と

池は維新ごろ江戸にいた。宮内省に入って大舍人を勤め、明治12年五十三歳で死亡。

那須は維新後、片岡利和と改名。明治官制の宮内省で侍従を務め、男爵に。明治41年七十一歳で死亡。

橋本は、蟄居中の岩倉具視と時局を語り、岩倉を大いに励ましたという。維新後に大橋慎三と改名して、有栖川宮の家令を務め、明治5年三十八歳で死亡。

浜田は後の宮内大臣、田中光頭である。宮内省でも、池や那須との関わったのであろう。龍馬と慎太郎の暗殺現場にいち早く駆けつけ、二人の銅像建設と顕彰にも努めた。桂浜の龍馬銅像建設運動では、秩父宮から御下賜金二百円を受け、無名の青年たちに勇氣と希望を与えた。

深尾家ゆかりの佐川町では昭和14(1939)年、赤土峠に「脱藩集合の地」の碑を建立して、脱藩者5人を顕彰している。碑面には男爵・深尾鼎の歌「真心の赤土さかしまちあわせ生きてかへらぬ誓いなき」が刻まれている。

奇しくもこの碑が建った年、往年の志士・田中光頭伯は隠棲地の静岡で薨去。正二位、96歳であった。

文教の町・佐川町は、郷校「名教館」で教育された多くの人材が明治期に活躍している。私は「幕末の志士」を想うとき、赤土峠に集合した若者たちを語らずにはいられない。

東吉野村エッセイ ⑤



奈良県東吉野村 阪本 基義



那須信吾愛用(矢立)

文久3年9月24日、那須信吾は天誅組討軍彦根勢のために東吉野村小川で戦死、同地の明治谷墓地に眠っている。

昨年11月、高知県津野町の友人に頼まれて、高知で英語のボランティアガイドを目指す女性と、その友人の弁護士夫人(奈良市)のお二人を、川上村と東吉野村にある天誅組史跡を案内した。

明治初期、川上村は、板垣退助の洋行に大金を寄付するなど自由民権運動のパトロンと目された日本の山林王・土倉庄三郎がいた村

天誅組・那須信吾といつても首をかかげる人がいるかも知れない。しかし、土佐藩参政の吉田東洋を暗殺した那須信吾といえは知らない人がいないだろう。もちろん同一人物である。

この村の林家である。この村の林家・住川準典さん宅に那須信吾の遺品「矢立」(筆入れ)があるというのでアポなしで訪ねた。幸い温和な老主人が招き入れてくださった。箱書きに、その由来が書かれていた。

「文久三年癸亥九月二十四日、天忠義軍の面々は武木村に到着、最期の昼食をとる。出立の朝、那須信吾先生の形見として陣中にて佩用せし「矢立」を遣わし、勇躍鷲家口に討ち出たり。(中略)世々累代まで志士等の高邁なる志を語り継ぎ、その忠誠心と遺徳を偲ぶよすがとして保存するものである」と。

この矢立、天誅組が武木で最後の昼食をとった際、この家の娘が那須信吾の武士の魂(刀)をまたいでしまった。スワッ！打ち首か！と思いきや、「かまん、かまん、もうすぐ、おまんなの世が来るがじゃきき」と、咎めることもなく食事のお礼に矢立を置いていった



住川準典さんと

という。

数日後、高知の彼女から丁寧な礼状が来た。案内役として一番うれしい瞬間である。

「個人では絶対に分け入ることができないような山越えの道、個人宅におじゃまさせていただき、那須信吾が託した矢立を拝見しながら、その方の曾祖母様が信吾に会った時のエピソードなどを直にお聞きすることができるとは、夢にも想像していませんでした。(中略) また東吉野村では、吉村虎太郎先生形見の織細で小さい龍甲と銀の箸を直に手にとることまで叶うなんて！今も住民の方々にしっかりと語り継がれ、それを誇りに、身近に思ってくれていることが肌で感じられて感慨無量でした」。

「ありがとう！森館長」 森館長の意志を継いで

2月2日、隣接する国民宿舎「桂浜荘」において、故・森健志郎館長の「お別れの会」が開催された。有志による実行委員会主催(委員長 宮田速雄・高知新聞社長)。

かつて新聞記者時代に一輪の花にまつわる「一輪一話」という連載をしたという森館長にちなみ、参加者は一輪の花を持参。森館長に捧げた。

平日にもかかわらず300名の方が集まり、2時間の予定が3時間余りになるほどであった。宮田社長のあいさつに始まって、女優の小林綾子さん、ギターデュオいちむじん、

日参加できない方々も、森館長に思いを寄せた。各人のエピソードは笑いや涙を誘い、「なぜ今、龍馬か？龍馬的に生きるとは？」を問い、発信し続けた森館長を偲んだ。

「子ども・龍馬フォーラム」一期生、東京吉祥女子高校2年(現3年生) 西内茉澄さんは「森館長がこれからの日本の未来と平和について真摯に力強く語っていたことを今でもよく覚えています。館長の意志は私たちが引き継ぎ、これからの日本は私たちが作っていきます」と誓った。前田 由紀枝

映画監督大友啓史さんたちのビデオメッセージ。オカリナや龍馬甚句、フォークソング、合唱、ビデオ紹介など、参加者も当日参加できない方々も、森館長に思いを寄せた。各人のエピソードは笑いや涙を誘い、「なぜ今、龍馬か？龍馬的に生きるとは？」を問い、発信し続けた森館長を偲んだ。

拜啓 龍馬 殿

106通

平成27年12月21日〜28年3月20日

「龍馬との約束」

お久しぶりです。お元気ですか。私は今年無事高校に入学することができました。何かの縁なのか、高校の名は龍野高校といえます。龍馬さん、高校の勉強ってゆうのは、授業をただ座って聞いていたら分かるものではないのですか(笑)。毎日、あー今日も学校があーって憂うつな気分で行きます。でも、私は絶対高知大学に行きたい。そして、今またあなたのこと知りたいたいです。今はまだ大学に届きそうもないし、模試の結果も散々で懇談でこっぴどく怒られました(笑)。しかし私は頑張りますよ！どんなにしんどくなくても熱が出て龍馬さん、あなたと約束したことは絶対に果たします。またオープンキャンパスに来たらうかがいます。

12月26日 兵庫 T・K 16歳 女性

「きつかけは娘」

はじめまして、龍馬さん。龍馬さんに会いに来るのは5回目ですが、初めてお手紙書いています。こうして龍馬さんに会いに来るようになったのは、我が家の娘が小学生の時、授業で習った時に龍馬さんを好きになった事がきっかけです。娘が龍馬さんの事を色々話してくれるうちに、いつの間にか家族みんなが龍馬さんを大好きになっていました。初めて桂浜を歩いた時は、「この同じ海を龍馬さんも見たんやなあ」「この浜の石、龍馬さんも踏んだかも」とハシヤギでした！そんな娘も春から

高校生となり、毎日勉強に部活にと充実した日々を送っています。ちなみに高校の名前には「龍」の文字が入っているんですよ。これも何かの縁かなと喜ぶ私達。また龍馬さんに会いに来れますように。

12月26日 兵庫 I・K 44歳 女性

「年末の帰省」

今年も帰ってきましたよ。ここに帰って来ました。奈良で生まれ、奈良で育った私ですが、毎年年末にはここに帰ってきます。一年間の疲れを桂浜で洗い流し、来年一年間頑張れるエネルギーをあなたからいただく。この年末の、帰省は、毎年の大切な行事です。今年もあなたから燃える思いをいただきました。これからも頑張ってくださいませよ！龍馬さん、見守ってくださいませ。

12月28日 奈良 N・I 52歳 男性

「最大の喜び」

生涯尊敬する人です。私も坂本龍馬のように、日本のために、と自らの命を懸けるような人になりました。暮末の頃に海を向こうの世界を見据えていたことは本当にすごいし、か言いがありません。船中八策、も今の日本の土台となっています。日本がこのような国になっているのも、坂本龍馬が幕末の人達が一生命努力してくださったおかげだと思えます。私も自分のできることを、精一杯人のためになることをしていきたいです。坂本龍馬を知

ることができたのは私の最大の喜びです。

「龍馬から返事」

お久しぶりです。龍馬さん。2012年12月28日、ここに来て、龍馬さん宛に書いた手紙が館便りに掲載され、自宅に送られてきました。届いた館便りを見た時、龍馬さんが実際に返事をくれた物と思いきや、四国を巡っています。前回来たときは一泊しかできなかったもので、少し急いで回ったのと、もの足りなさを感じていたのですが、今回はゆっくりあなたの歴史にふれて帰りたいと思います。今回はとても天気も良く、気持ち良いです。今年一年、良い年でありました。最後になりましたが、あけましておめでとう。

1月1日 東京 M・Y 54歳 男性

「だいたすきりょうま」

お正月のかぞくりょうまめできたよ。さかもりようまをめであてきたからこれうれしかったよ。さかもりようまはかっこいいね。かとりもこのにはあったことあるかな。たかすきんさくにもあったことあるかな。くさかげんすいも、もつりたかちかにもあったことあるかな。さかもりようまだいたすきりょうま。

1月1日 兵庫 M・T 8歳 女子

「人生の指針」

今日やっと龍馬記念館に来る事が出来ました。龍馬の心の中に飛び込んだ様な思いです。何をどう考え、どう目指したか、まるであなたは日本の歴史の上にその天命を授かって世に降り、そして又その使命を終えて天に帰ったか様に思えてなりません！私はいつも、龍馬だったこの場をどう考え、どう判断した

「北海道より」

北海道からはるばる来ました。龍馬の一生を振り返り、息子にも龍馬のように志高く生きてほしいと思えました。桂浜の美しさにも感動です。

1月11日 北海道 O・Y 34歳 女性

「志を持って闘う」

四年ぶりに帰ってきました。今回は二度目の訪問です。初めて来たときは浪人が決まり、先が暗かったのですが、ここに来たことで受験だけでなく未来に対する力をもらいました。今は無事に大学に進学し、今年から就職活動です。またここで龍馬さんから力をもらい、大きな志を持って闘いたいと思います。受験時はありがとございました。これからも見守っていただけたいと思います。またいつか帰ってきますよ！

1月13日 東京 S・O 22歳 男性

「龍馬マラソン」

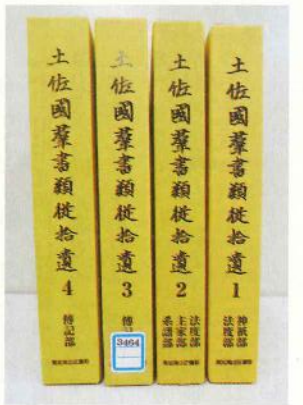
高知龍馬マラソン完走目指して頑張ります。

1月13日 岡山 M・Y 33歳 男性

編集者より
毎年来てくださる方、3年ぶり、4年ぶりと再訪して下さる方々にとって、この地が「心のふるさと」のような存在となっていることを大変うれしく思います。平成29年は年間休館となりますが、シェイクハンド龍馬像と太平洋は変わらずに、この地で皆さまをお待ちしております。
尾崎 由紀

「土佐国群書類従拾遺」

三浦 夏樹



現在、高知県立図書館で「土佐国群書類従拾遺」(土佐国群書類従「全一三巻はすでに刊行済み」)の刊行が進められている。本書は、幕末土佐の庄屋・吉村春峰が、堀保己一の『群書類従』にならって土佐の史料をまとめたものである。(詳細は県立図書館HPを参照)県立図書館にあった稿本は、太平洋戦争の時に焼失してしまったので、編集作業は国立公文書館内閣文庫所蔵のものを底本として活字化している。

本書には興味深い史料が多数含まれており、今後、様々な研究に活用できるはずだ。ここでは、私が気になる史料を二点紹介したい。

まず、第二巻に「容堂公付歩士某筆記」という史料がある。文久二年(一八六二)に、江戸の藩邸で容堂付きの家臣が記した日記風の記録だ。これには容堂とその家臣たちの容姿の姿や、容堂でも抑えが効かない猛犬のような上士たち。そんな家臣を気に入って側に置き、楽しそうに容堂の様子。極めつけは、松平春嶽の一大決心を聞いて、夜中、騎馬二頭だけの供で良い、とわめいて土佐藩邸を飛び出し、堤防沿いの暗い道を、越前藩邸目指して駆けると、案の定落馬してしまふ。騎馬以外の供はいらんと言われても、家臣としてはそうはいかず、馬の後を追って続々と走って追いかける様子など。人間味が溢れた非常に面白い史料である。

それから、今年の二月に刊行されたばかりの四巻には、吉村春峰が集めた史料中、最も重要といつて過言ではない天保庄屋同盟の史料が載っている。

土佐の庄屋たちは、天保期に同盟を結び、その同盟文の中に「尊王思想を盛り込んでいた。後に結成された土佐勤王党には、庄屋同盟を結んだ次の世代の庄屋層の若者が多数参加した。庄屋同盟は土佐の幕末史の幕開けといつて良い出来事だ。活字化されたことで、さらに研究が進むことを期待したい。

「高知城を国宝に！」

「高知城を国宝にする県民の集い」発起人代表 島崎 順也



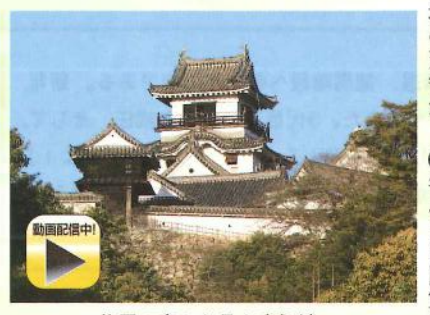
私は追手門から高知城の天守閣を眺めるたび、何と美しい城かと感嘆します。高知県民には慣れ親しんだ、日本屈指の名城です。来年には「県立高知城歴史博物館」もオープンします。そこで私は、「土佐史談会やフェイスブックのメンバーたちと「高知城を国宝にしよう」と立ち上がり、運動の輪を広げています。

高知城は、奇跡の現存天守12城の一つです。その特長は、本丸に本丸御殿と天守がある日本ただ一つの城で、本丸の建造物11棟も完全な形で残っています。400数十年前、安土桃山時代には全国に3千近くの城がありました。その後、慶長20(1615)年、江戸幕府の「一国一城令」により約170城に激減、さらに明治政府の廃城令により60城に。昭和初期には20城となり、太平洋戦争を経て現存の12天守だけが残り残りました。

高知城は昭和9(1934)年に国宝に指定されたものの、昭和25(1950)年に施行された文化財保護法により、天守他15棟が国の重要文化財指定となりました。変更の理由は、江戸時代中期(1727年)の火災により20年後には再建されたこと、戦後に解体再建した際の学術的調査がなされていないことなどです。また、お堀の埋立てや公園化されたことなどもマイナス要因になっているようです。

しかし、国宝は建造物1棟でも国宝になります。再建時の詳しい文書を見つけ当時の様子を確かめるなどしたら、国宝指定も可能です。

昨年7月には松江城の天守が、63年ぶりに国宝指定されました。松江市民の10年に及ぶ運動が功を奏したとも聞きます。高知城を国宝にしようという私たちの運動にも、県などの関係機関も賛同し動き始めています。高知城を日本の宝にしようではありませんか。HP「高知の面白いページ」もご覧ください。



龍馬の家から見た高知城

飛騰の紙面にスマホをかざして動画を見よう！ 視聴方法は簡単！

① 右のQRコードから無料アプリ「COCOAR2」をダウンロード
② アプリを起動し、マークのついた写真にスマホをかざす

※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかる場合や、正常に動作しない場合があります。
※本コンテンツは2016年6月30日まで閲覧可能です。

■ ~龍馬の生涯が生き生きと~ 「江本象岳 龍馬絵伝」展を終えて



展示風景



「波瀾」

海に見える・ぎやういでは2月から2ヶ月間に渡り、徳島県在住の仏画家・江本象岳さんの展覧会を開催した。

「龍馬絵伝」は、龍馬の生涯が、大きさ53cm×41cmの10枚の画面の中に凝縮されて、約50人の登場人物と共に描かれた作品である。龍馬が乙女に鍛えられている幼少期「誕生と修行」から始まり、ドラマティックな生き方を走り抜け、幕末の志士達に囲まれ笑顔の龍馬と中岡慎太郎が肩を組んでいる「船出」に終わる。どの場面をとっても一つ一つの動きが、筆先から踊り出たかのように生き生きしていた。龍馬に関して言えば、どれ一つとして同じ表情はしていない。しかし、視線は常に遠くの未来を見据えている。近年、龍馬や幕末の志士達の制作に熱中している江本さんの念（おもい）が、まさにここに表現されていたと思う。また、10枚の作品解説は歴史記述に加え、画面のシチュエーションが土佐弁の台詞調で面白可笑しく書かれていた。

会場を後にする頃には、龍馬の生き方が追体験出来た様な気分になり、改めて「坂本龍馬」という人物をもっと知りたくなったのではないだろうか？

この作品は、龍馬の通説を絵にしたもので、ご自身が「絵伝」として描くことになった経緯は、前回の当記念館での展覧会后、故森館長との談話の中で出たアイデアからである。龍馬の根底にある「不戦」の念（おもい）を、龍馬や森館長と共有しながら約1年かけて筆をすすめられた大作の展覧会であった。

これらの作品は、2年後に出来る新館で改めて展示する予定である。

中村 昌代

■ 第5回高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会パネル展（4月1日～5月7日）

昨年5月の現代龍馬学会での発表内容をパネル展示で再現します。

龍馬を通じた研究発表の場として開設された同学会は、多彩に多面的に各自の論を展開しています。第7回目となった昨年のテーマは「龍馬生誕180年・原点再考」。作家・小松成美さんの基調講演「坂本龍馬が築いた日本人のプライド」も好評で、参加者にも大きな刺激となりました。高知だけでなく、北海道から九州まで会員の幅も広がり、見識への特長も加わっています。

今回、生誕180年にちなんで6つのパネル内容です。

その内容は、「昭和3年桂浜龍馬像建立発起人の若者たちの熱き思い」椿原庸夫、「現代の青年たちの新たな龍馬像建立物語」柴崎 賀広、「子どもたちの教科書に坂本龍馬は？」宮英司、「幕末を記した貴重な日記」鈴木典子、「生誕地の人々の龍馬顕彰」森本琢磨、「生き延びた志士の明治」亀尾美香。『第7号学会紀要』（ショップで頒布中）と合わせ、お楽しみください。手島 ゆか



昨年開催したパネル展の様子

入館状況

2016年3月20日現在（開館以来8,849日）

- ◆総入館者数 3,800,488人
- ◆最多入館 (2010年5月2日) 6,686人
- ◆最少入館 (2004年10月20日、台風のため) 8人
- ◆2015年度最多入館(2015年5月4日) 2,429人
- ◆2015年度最少入館(2015年7月17日) 74人

編集後記

今年は薩長同盟締結から150年。翌年の大政奉還、龍馬暗殺への助走の年である。新年度を迎え、記念館にも新しいプレリウドが聞こえてきた。3代目高松館長の就任。そして、夏からの新館基礎工事の始まりである。桂浜が新しい時を迎える。「いよいよ始まりぜよ！」。龍馬の声が聴こえる。気持ち引き締まる。今号から寄稿、連載などシリーズものが増えた。早々に原稿を寄せてくださった皆さんの熱い思いがうれしい。(ゆ)

館だより「飛騰」第97号（年4回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏

発行日 2016(平成28)年4月1日
 発行 公益財団法人高知県文化財団
 高知県立坂本龍馬記念館
 〒781-0262 高知市浦戸城山830
 TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015
<http://www.ryoma-kinenkan.jp>
 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00～17:00 年中無休
 入館料 一般500円・高校生以下無料
 身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・
 戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者1名
 高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、92円切手5枚をお送りください



「土佐湾フレンズ」事務局長
吉松 由宇子

浦戸を愛した “兄さん”の思い出

私のテーマ

私は一年に一度、古ぼけた山水画の軸を床に掛ける。それは「兄さん」からもらった掛軸で、私を過ぎ去った昔へと誘ってくれる。

浦戸に住み着いた青年

今から四、五十年前も前、一人の青年が浦戸に住みついていた。その青年は出身地も名前も明かさず、いつしか地元の人には「兄さん」と呼んでいた。

兄さんは浜のゴミを拾い、坂本龍馬の銅像の下で、龍馬さんと同じように海を眺め、長宗我部元親の居城・浦戸城跡に登り、一領具足を祀る六体地藏に手を合わせる。まるで浦戸の歴史の中に身を置いて生きているような毎日であった。

髪や髭はのび放題ではあったが、その瞳は涼しく、折節には博学を覗かせる不思議な人だった。初めは、浜近くの通路をねぐらにして、五色石を拾うなどして日々の糧にしていたようだが、ある頃から我家の舟小屋に寝泊まりをするようになっていた。昭和39（1964）年私が嫁いだ時、すでに兄さんは我が家にいた。我が家はガソリンスタンドを経営していた。

ある日、浜を台風が直撃するというニュースに、私たちは早

めに店を閉め台風が備えていた。夜半、風雨が強くなったため、義母は「兄さんが危ない」と言つて家を飛び出した。兄さんの小屋は、大波が打ち寄せる危険な場所だった。やがて義母は、濡れそぼつて震える兄さんを連れて帰つて来た。義父は黙つて風呂を焚き、私は下着を用意し、汁を温めた。心ばかりの接待を受けた兄さんは、感極まったのか急に泣き出し、嗚咽の中でこんな話を始めた。

「訳あつて名前は申せませんが、私は決して怪しい者ではございません。幼い頃から歴史に興味があり、

土佐の長宗我部元親と坂本龍馬が大好きでした。大学を出て就職

してもその気持ちには強くなる一方で、ペギー葉山の『南国土佐を後にして』の歌に誘われるように、土佐

に来たのです。それから

は知り得るかぎりの史跡を巡りました。中でも五台



昭和50年代半ば、「吉松石油店」の前で新しい制服に身を包んだ“兄さん”（左から2人目）その右隣の2人は、店主である両親

山の竹林寺や吸江寺の歴史の重さ、白砂青松の龍馬の愛した桂浜。沖にはイスパニア船、サン・フェリーペ号が漂い、たもと石には龍馬の船が見えたという、世界に繋がる浦戸湾に惹き込まれました。浦戸城跡に登ると元親、盛親父子の声が聞こえ、打ち寄せる波音に一領具足の雄叫びを聞くのです。私は彼等に憑りつかれたように、この素晴らしい浦戸から離れられなくなりました。

そんな話をした後、兄さんは私の夫の店を手伝うようになつた。しかし、それまでの無理が

たたつたのか、お酒が過ぎたのか、あつけなくこの世を去つた。私が嫁いで約20年、兄さんはまだ50歳の若さだった。私は遺骨を竹林寺に預け、永代供養をお願いした。それは、兄さんの只一つの願いだった。

兄さんが亡くなって数ヶ月後。いきなり市役所から身元が判明したとの連絡があり、兄さんの母親と妹さんが九州・福岡から来られた。葬儀に参列した義父によると、兄さんは本名を浜田三代治と言ひ、六人兄妹。母親は「浦戸の方々の厚情を受け、大好きな土佐で死ぬことが出来て幸せな子です。土佐の人々への感謝の気持は生涯忘れません」と涙ながらに語つたという。

浦戸の歴史と兄さん

私の義父母や夫は亡くなった。しかし今も、私と兄さんの親族との交流は続いている。幼い孫たちにもいずれ、兄さんとの思い出を話して聞かせたい。九州からはるばる訪ね来て、この浦戸という風土や歴史に魅せられ、「兄さん」とだけ呼ばれて、30年もの歳月を過ごした男がいたこと。何よりも、浦戸にはそこまで人を惹きつける素晴らしき歴史があることを。そのときには、兄さんにももらった古ぼけた軸も、床の間で耳を傾けてくれることだろう。

人生は「冒険」 予測がつかないから面白い

ノンフィクション作家 **小松 成美** さん



「坂本龍馬記念館・現代龍馬学会」は、今年度で8年目を迎えた。昨年5月の研究発表会の基調講演は作家・小松成美さん。2年前に高知県観光特使となった小松さんの全身からは、「龍馬が大好き」という思いが伝わってくる。講演をお願いしたとき、「研究者でもない私でいいんですか？うれしいです。よろこんで」と快諾してくださった。そのときの「龍馬が築いた日本人のプライド」という講演は、彼女が取材した一流アスリートや歌舞伎役者の中に龍馬が生きているというようなもので、参加者の感動を呼んだ。

全国各地を取材や講演で飛び回り、執筆する多忙の日々。そんな小松さんから時折「今から友人たちと記念館を訪ねます」「新刊本を持って行きます」という連絡が飛び込む。

今年2月にも小松さんは、新刊『五郎丸日記』（実業之日本社）を手に来館された。その小松さんに「インタビューさせてもらえませんか？」と伺うと、即座に「よろこんで」。

それから間もなく、私の出張に合わせる形で東京でのインタビュー。会場は「目黒雅叙園」にご協力いただいた。

「古墳を掘るぞ」つて矢張り探しているような子どもだったのね。だから、小学校の頃のあだ名は、土の中。(笑)。

スポーツも好きでしたね。でも、学校のワークシートなんて興味ないから答案を白紙で提出したこともありま

いやあ、カッコいい。子どもの頃から信念を貫いている感じがありますね。作家への道のりは、

子ども時代から作家にあってはいたが、なかなか簡単ではありませんでしたよ。

私は高校を卒業して広告の専門学校へ進みました。その後広告会社に就職した後、TBSに移りました。ちょうど御巢鷹での日航機事故や成田空港開港後の三里塚闘争のあった頃で、私は事務職でしたが、取材記者と毎日語り合っていました。

しかし、当時は「女はクリスマス(25歳)を過ぎたらダメ。若い方がいい」という風潮がありました。自分の存在



作家の「プライド」が「ネルギー」源に

お忙しい中お時間をいただきありがとうございます。

この「目黒雅叙園」はNHK大河ドラマ「龍馬伝」で、岩崎弥太郎主催の宴会場として使われました。また同じ年に園内の百段階段（都指定有形文化財）で「龍馬展」を開催。来年には記念館の巡回展会場となります。少し宴会場あたりをご覧いただきませんか？

わあ、初めて拝見したけれど、素晴らしい所ですね。目に映るしつらえ全てが見事。こんなところで龍馬の話など聞いてみたいですね。

小松さんは感動を全身で表して、キラキラしていますね。

さあ、インタビュー。よろしくお願ひします。

小松さんには、前々からぜひ伺いたいことがありました。貴女のそのみなぎるパワーはどこから来ているのですか。

はい。それは好奇心であり、そこから生まれるチャレンジでしょう。私の中には絶えず「時代の意志」に添いたいという思いがあります。時代がどう動いているのか、どこに向かっているのかということに好奇心がわくのです。

まあ無論、私が作家であることも大きいんです。作家を生業としていざという時の矜持があります。詰まるところ、自分自身の存在証明かな。

作家の矜持、プライドねえ。清々しいですね。

価値をかなり考えました。

よく分かります。男女雇用均等法、キャリアウーマンなんて言葉があっても、実態は「イフカクリスマス」か「なんでもセクハラ時代。女たちは自分探し」をしていました。

そうですね。ピラミッド型の階級社会に属さず、独立したい。人と群れず、一人でできる仕事にシフトチェンジしたいと思いたくはないと思いついたのです。

しかし、悩みましたよ。考えすぎてメニエール症にまでなつたくらいです。なんとか週刊誌やスポーツ誌で執筆させてもらい、そこで人を育てる編集者と出会いました。私を見捨てずに



10代で何度も読んだ「龍馬がゆく」

そんな小松さんの子ども時代ってどんなだったのですか。

私の両親は福島出身です。私は子どもの頃、夏休みに西白河郡の祖父の家にいくと、白虎隊の悲しい話を聞き、会津の教えを学びました。「ならぬことはならぬものです」という教えですね。そんなことから歴史には興味がありました。

小学校5年生のとき、家の本棚にあった「龍馬がゆく」を読みました。龍馬とお田鶴さんのくだりなど男女のことなんてドキドキしながら(笑)。中学校、高校と好きな所は何回も読みましたよ。龍馬の30数年の人生にときめきました。勝海舟や松平春嶽も魅力的。薩長同盟のくだりは感動的でした。

司馬遼太郎さんは薩長同盟のくだり「長州が可哀そうではないか」という龍馬のひとことのために3千枚を費やしたとも言いますね。それで。

育ててくれたことに今でも感謝しています。

その後、私は国内外問わずむしやりに取材し執筆しました。中田英寿、イチロー、葛西紀明、白鵬、五郎丸というトップアスリートたち。無名時代から追いかけた人もいます。片岡仁左衛門、中村勘三郎、森光子など多士済々です。

子ども向けの龍馬の本や、高知ゆかりのダイヤモンドダイナミック村社長の本も書きました。いずれ歴史小説にも挑戦しますよ。

それが25年以上続いているのです。

「人生は予測がつかない」

多くの方を取材している小松さんから見て、龍馬ってどんな人間だと思いますか。

成功者ではないですね。煩悶し悩んでいます。友とも袂を分かちながら、集団にもなじめず、孤独な人だと思えます。だからこそ魅力的ですね。

龍馬の言葉で好きな言葉は。

龍馬というより、「龍馬がゆく」の中の言葉ですが、「事をなさんとすれば、智と勇と仁を蓄えねばならぬ」です。

「仁・智・勇」は儒教の三徳で、仁は他人に対する優しさと思いやりの心、智は事象を論理的に捉え、的確に判断する能力、勇は



「龍馬がゆく」によって、人に対する影響や感動を喚起する「作家」というものにあこがれました。作文も得意だったし、読書が好きで、なんでも読みましたよ。「少年少女文学大全集」や「三銃士」、アガサ・クリステイ、何よりも、司馬遼太郎に魅せられていきました。学校の教科書では年号しか学ばないけれど、本には「人生」があります。自分と同年のとき、その人はどうしていたか。どんな青春だったのか。龍馬ゆかりの場所を訪ね、高校時代からはリュックサックを背負って各地を旅しました。

読書が行動につながっていく。まさに好奇心がチャレンジになっていくようにですね。

まあ、変わった子どもでしたね(笑)。

私の住む保土ヶ谷区は造成地で、貝塚があったり、掘ると矢じりが出てくるような所でした。私は、友だちがリカちゃん人形で遊んでいても全く興味がなく、

どんな事態に直面してもぶれることなく対峙していく心。人の人生に寄り添い、そのドラマを余すところなく綴る作家にとって、なくてはならないものです。

取材し本を書く前に、いつも唱えている言葉なんです(笑)。

最後に、言葉を生業にしている小松さんの座右の銘がありますか。

「人間万事塞翁が馬」ですね。福から禍へ、また禍から福へ。禍福は予測が叶わない。人生は冒険であり、だからこそ面白いと思えます。

小松さんの「冒険」はまだまた続く。春風のような華やかさの中で、人知れない苦勞も多いだろう。しかし、それを見せないのが、成美、流。

女たちはがんばっている。見習わなくてはいいかな。

小松成美(こまつなるみ)

1962年神奈川県横浜市生まれ。1982年専門学校で広告を学び、1982年毎日広告社へ入社。その後、放送局勤務を経て、1990年より本格的に執筆を開始する。主題はスポーツ、映画音楽、芸術、歴史など多岐にわたる。情熱的な取材と鋭い筆致、磨き抜かれた文章にファンも多い。近著「それこそ七ヶキGreenの物語」(KADOKAWA)角川文芸文庫で作家の矜を上げた。

前田 由紀枝 (まえだ ゆきえ) 現代龍馬学会理事 高知県立坂本龍馬記念館学芸課長

「師弟の契り」

宮川 禎一

千葉定吉先生のことを書いておこう。龍馬の長刀兵法目録(安政五年)の検証に際して思ったことがあるからだ。

目録の全文は桶町千葉道場の主である千葉定吉の自筆とみられる。鳥取県立博物館に所蔵される別の免状に記載された角印も花押も署名の「政道」の文字も龍馬の目録と一致しているからである。誰か別の者の筆だとは重太郎の代筆などとは思えない。

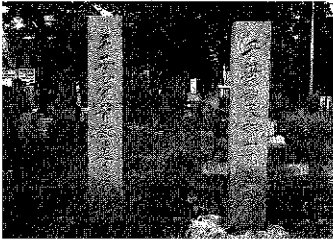
巻物を納めた桐箱の蓋表の「北辰一刀流長刀兵法目録」の墨書も書風から定吉先生の文字とすることができ。いくつかの目録の文字を比べて見たが、龍馬の目録の字がいちばん気合が入っているような気がする。剣客らしい鋭さを持ちながらもバランスの取れた気品がある書だ。

清河八郎が万延元年に本家の千葉栄次郎・道三郎兄弟から授かった「北辰一刀流兵法免許」(清河八郎記念館蔵)もよく見ると千葉定吉の筆によるものと思える。千葉周作亡きあとの北辰一刀流一門の重鎮として本家玄武館の免状も書いていたのであろう。

ものの本を読むと剣道場の入門式とは「結納」と同様であり、いわゆる「師弟の契りを結ぶ」ものであるという。あつちの方が良さそうだなどと気ままに他の流派に乗り換えたりはできないのだ。

丹波山国隊の取締であった藤野斎は「征東日誌」の中で桶町千葉道場入門の様子を次のように記している。慶応四年七月二十六日「晴。千葉道場へ入門ノ銘々ヲ引率シ、藤野・辻参向シ束修金子(千カ)・匹并二重練台三本ヲ進呈ス。之例ナリト依之、一隊快宴ヲ開キ之ヲ励賞ス」云々と。

千葉定吉と坂本龍馬も入門の段階で契りを結んだのだ。目録の丁寧さは師弟の絆の深さを示しているように感じる。



千葉定吉・重太郎父子の墓碑
豊島区雑司が谷霊園

“話してみるかよ”

「龍馬さんにお尋ねしたいことあり」

鈴木 典子

坂本龍馬が活躍した慶応二年～三年にかけての長崎での出来事を記した「池道之助の思い出草」と「嘶の種」から、一つのことをお尋ねします。

池道之助の記録とは次のようなものです。

土佐沖で遭難し、アメリカの捕鯨船に助けられ、十年間のアメリカ生活などを経て帰国した中濱万次郎は、幕府から旗本の身分を与えられて土佐の中濱浦に母に会うため帰省します。その時、同郷の六歳年上の池道之助に長崎行きを勧めます。道之助はその熱心な誘いを受けて、土佐藩の家老後藤象二郎一行と共に長崎行きのチームに加わるのです。その旅の記録と長崎での出来事を記した日記です。

当時、すでに脱藩者であった龍馬は、その活動にも限りがあり、脱藩者の汚名が土佐藩から解かれるまでは、表向きは才谷梅太郎

と名のついていた部分もあったのです。才谷とは、龍馬の先祖の出身地才谷村(南国市)のことで、その古い屋敷のそばに先祖の墓も残されているのです。姉らと共に暮らしたのは、高知市の上町というところでした。

道之助の記録には龍馬と宴を共にしたところはないのですが、いろは丸事件の後、才谷梅太郎が加わったの紀州との話し合いや聖福寺(紀州の藩邸・つまり事務所)へ出掛けての談判を共にした記録は度々記してあります。

池道之助の記録には、土佐の鰹節百本が用いられた記録があり、芸州藩の船を拝借した礼として記されています。当時この旨いダシを使って日本料理が作られていたことが分かります。

そこで龍馬さんに、長崎や、京都、大坂などで、どのような旨い料理を食べていらっやったのか、お尋ねしたいのです。シャンパンやパン、カレーライスなど、西欧の文明に華やいでいた長崎でのハイカラ料理と日本文化のおもてなしを聞かして欲しいのです。

平成28年度 第8回現代龍馬学会 総会・研究発表会

テーマ「夢新たに」

本年は、薩長同盟締結から150年。この時代の大きな転換点は、まさに現代の様相と重なります。龍馬の夢に私たちの夢を合わせ、新しい時代のあり方を考えます。研究発表会、懇親会には、どなたでもご参加いただけます。ぜひご参加ください。

日時 平成28年5月28日(土)

◆総会9:00～ ◆研究発表10:00～ ◆懇親会17:40～(会費制)

会場 国民宿舎桂浜荘(記念館隣)

参加定員 120名 参加無料(要申込)

■ 特別講演(13:25～14:25)

古城 春樹氏(下関市立長府博物館館長)

「薩長和解から盟約締結へー長州内部事情と語られない過程」

■ 研究発表(午前の部10:00～12:20/午後の部14:35～17:00)

網屋 喜行氏(鹿児島県立短期大学名誉教授「吉田」本家の末裔)

「生誕200年! 「吉田東洋」研究の歩み・到達点と課題」

今井 章博氏(土佐史談会会員)

「大町桂月の「伯爵後藤象二郎」余話」

竹内 土佐郎氏(現代龍馬学会理事)

「明治維新に華と散った安田の志士たち 一二十三人に想う」

宮川 禎一氏(京都国立博物館学芸部列品管理室長)

「龍馬の刀をめぐる諸問題」

川崎 弘佳氏(高知市立一ツ橋小学校校長)

「子ども・龍馬フォーラムからスタートした『世界に折り鶴を送ろうプロジェクト』」

前田 由紀枝氏(坂本龍馬記念館学芸課長)

「『家族の肖像』③ 坂本家資料に見る“龍馬”その後」

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

〒781-0262 高知市浦戸城山 830

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015

mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp